
俺日記（私）

青春ホルモン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺日記（私）

【Nコード】

N4193L

【作者名】

青春ホルモン

【あらすじ】

名前をつけるのが趣味な主人公と、名前のない主人公と、その他もろもろの主人公達の話。

作者の意図しない方向へひた走る、このストーリーは完結するのか！そして作者の頭に浮かぶ幻のハッピーエンドへとたどり着くことができるのか！！

全てが未完のストーリー！！いつか終わるさ

はじめに（前書き）

つぎからが本番です！

はじめに

私（俺）たちになんげんは記憶する動物だ。しかし、同時に忘れる動物でもある。

俺（私）たちには忘れたくないこと、忘れたいことそれぞれいっぱいありすぎてぜんぶ覚えることは不可能のようだ。

この物語は、一介のになげんである私（俺）の日々をつづった記録である。

まだ何ひとつ成し遂げた経験のない今の私（俺）は自分の呼び方さえ定まっていらない。

一体全体どうなるのか、それは今の俺（私）にすらわからない。

なぜなら、この物語は私（俺）自身の行動に大きく左右されるからだ。あしからず。

はじめに（後書き）

一話目投稿したんで見てください！！

第1話：黄色いアイツ（前書き）

連載スタート！！

第1話…黄色いアイツ

ぴ○ちゅゝ。ぴ○ちゅゝ。ぴっぴ○ちゅー!!

目が覚めると、胸の上には先日くじ引きで手に入れた某人気キャラクターの目覚まし時計が乗っかっていた。

上目づかいでこちらを見つめるその姿はかわいらしくもあり、憎憎しくもる。全体的に黄色いくて大きい目は愛くるしい。黄色いそいつは俺のことを起こす気などさらさらないのか知らないが、ささやくような鳴き声で毎日起こそうとする。

そんな鳴き声では俺を起こすことはおろか名前すら覚えてもらえないだろう。手に入ってから毎朝、そうやっていつて聞かせているのだが反省の色はまったくくない。

ゴトゴトゴト、ゴン!

痛い!!

しかしなぜか鳴きながらすさまじい勢いで身を震わせるので、決

まっ　て最後は俺の頭の上におちてくる。

こいつはこいつで与えられた仕事をまっとうしようとしているのかもしれない。まったくけなげなもんだ。名前は知らんけど。

いつもはまだ眠っている俺だが名前のわからないそいつのがんばりに免じて起きてやることにした。今日は用事もあることだし。

上体を起こすと反対側のベットには同室者たちが眠っている。起こすのもかわいそうだと思ってゆっくりとドアから出た。

廊下に出るとまだ8時なので誰もいない。寮に住む者たちにとっては、変化のない毎日を変化のない友人たちと過ごすより眠りこそ快楽なのである。

きつと今もアラビアンナイトに宇宙旅行、はたまた熱湯我慢大会の夢をみていることだろう。山賊と戦ったり宇宙人と戦ったり自身と戦ったり、もうわけもわからないくらい戦いまくっているだろう。そんなの知ったことではないが、顔を合わせるのも億劫なので忍び足で歩いた。

そろりそろりと廊下を進み、やっと洗面所にたどりついた。中に入っても誰もいなかった。

朝日を受けてピカピカに光る鏡。センサー付の便器の群れ。大理石の手洗い場。不必要までに金がかかったこの空間は見ただけで、

便意のないものまで入りたくなってしまふ。そんな理想の機能空間を一人で使えるとは私は贅沢なやつだ。

ジャブジャブ顔を洗って頭を上げると俺の顔が鏡に映し出された。

きりりと引き締まった顔はなんとも男らしい。しゃべらなくても女子に人気のある俺はたぶん端から見ればイケ面なのであろう。だが、問題は中身がこの俺だということである。

クールと陰気は紙一重、俺はまともに女子と話すことすらできない。それともう一つ、私は自分のことを私と言ったり、俺と言ったりする。未熟者の私（俺）には生き方のハウツーなんてまだない。

したがって、自分の呼び方さえ定まっていけないのだ。

他人が使えばなかなか便利であるはずの体だが、俺にはさっぱり使い方がわからない。なので17歳の俺に彼女はいない。できたことすらない。

部屋に戻り一通り準備を整えると俺は早速出発することにした。

自分のベットには俺の代わりに黄色いキャラクターが眠り、反対側の同室者は夢の中で熱湯に耐え忍び、俺のほかに起きているものは誰もいない。

第1話：黄色いアイツ（後書き）

応援よろしく！

第2話…まゆみ

さてと。誰に会うこともなく無事玄関に辿り着いた。

玄関を出たとしてもまだ敷地の中だ。完全に脱出するには門を抜けなければならない。

ドアを開けた私は上着のチャックを引き上げた。

寒冷前線はいまだ日本に踏ん止まり、もうすぐ五月だというのに肌寒い。

長袖のシャツに厚手のフリースでちょうどいい程だ。

背中のリュックがずしりと重い。だが、その中身のことを考えるとその重さがむしろ俺を中に浮かせた。

軽く屈伸した後、軽快なステップで自転車置場に向かった。

ドスッ、ドスッ、ドドス！

端から見ればさぞ重苦しいステップだったに違いない。

自転車置場に着くとすぐに使い古した自分の自転車を見つけた。ボディは剥げかかった赤いペンキでコーティングされていて、俺ごのみの愛着の湧く仕様となっている。

もう五年乗り続けたサドルはしっくりとお尻にフィットする。包みこむ感触は滑らかでひんやりしていて気持ちいい。

このサドルはおそらくもう俺以外の誰の尻に合うこともないだろう。

使い古されたハンドルはがたがたとよくゆれ、チェーンは錆びびついている。

買い替えるつもりはない。

こいつは俺の共であり戦友だ。

こいつは俺が鉄拳を持って憎きアンチクショウに制裁を加えんとする度に、息巻く俺を制し、

「殴るのはいけません。あなたはそんなことする人じゃないでしょう！」と月日を重ねた付き人の如く俺に諭すのである。

本当にそう言っているかのように、そういう時はいつも空気は満タンだ。

そしてその後、俺を無理矢理戦場から外へと連れ出すのである。

手際と速さといったら他に比べようもなく、その場に本当に俺がいたのかさえ敵に気づかれない程である。

おかげで俺はいまだこの手を振るわずに済んでいる。

軋むペダルを踏み込み、門へと走り出した。朝の日差しの中、私はゆっくりと優雅に進んだ。

だがものの百メートルと進まない内に、背後に猛烈な視線を感じた。私は素早く、しかしあくまでナチュラルにスピードを加速させた。

私の努力も虚しく後方で、私のことを呼ぶ声が聞こえる。
「イカサマ野郎！！まで、一緒に来い！！」なんだ、違った。俺じゃない。俺はイカサマなんてやってない。全てはあの男がやったんだ。

私は一度止まり、きっちり和解を済ませた上で反論しようと思った。

が、残念なことに私には時間がない。後ろを見るとバットを持った屈強な男たちが5・6人、追いかけてくる姿が見える。

何だろう。野球をするんだろうか。私は野球は得意ではないので誘ってもつまらないと思うのだが。

だから他の奴を誘ってくれ、頼むから。

彼らのためを考えて私はさらに足に力を込めた。

私の自転車も俺に賛同してくれるのか、ぐんぐんスピードが上がっていく。

今日も空気は満タンだ。ペダルを踏みながら考えた。

うむうむ・・・。

よし、せっかくだからコイツに名前を付けてあげよう。緊急事態
にもかかわらず私は突拍子のないことを考えはじめた。

必技、現実逃避！！

………そうだ！

「まゆみ」にしよう。漂う上品さがピッタリな気がする。

しかしこのままでは人名なので敬意を評して「号」を付ける。

…よし！

「まゆみ号、いくぞー！」私は右手を掲げながら叫んだ。

眼前には壁のように立ちふさがる門が見える。コンクリートで塗り固められた姿は見るからに頑丈そうだ。高さはだいたい一メートル五十センチといったところか。

残り六十メートル。開いた隙間は通るには充分そうだ。

残り四十メートル。一瞬後ろを振り返ったがすぐに前を向いた。荷台にバットをたくさん積んだ黒い軽トラックが迫ってくるのが見えた。

残り十メートル。
おそろしいことが起きた。私の逃走経路すら奴らの魔の手が伸びていたのである。

スローモーションのように世界がゆっくり流れていく。

門の横にある藪のなかから突然現れた奴らの手下共は、何を血迷ったのかいそいそと門を閉めはじめた。

「何のつもりだ！」俺が叫ぶ。
「こうしないと俺たちが行かないといけなくなる！」群集の一人が言った。

「甲子園でもなんでも目指すがよろう！」

「甲子園？何のことを言っているんだ。奴らはそんなの目指しちゃいない」

「じゃあ、あれはなんだ！！」真後ろを指差した。

「さあな、昨日の腹いせじゃないか！？」同情と哀れみのこもった声だった。

「そうはいかん！！」

股間がじつとり汗をかいていた。

門はみるみる閉じていく。まゆみ号も廃車を覚悟したのか、ぎゅぎゅぎゅなり声をあげている。

だが、俺はスピードを緩めない。閉まる。進む。進む。進む。進む。進む。

猛然とつき進み、まさにぶつかろうとしたその時、

「いっけー！！」

私の自転車は高く、高く跳躍した。

昔みたビデオのワンシーンに同じようなの同じようなのがあった気がした。頭の中をぐるっと見回したが、見つかったのは借りっ放しの猥褻ビデオだけだった。

ガガッ、ゴンー！

バツ、ごろごろ。

ききつ、バカヤロー。

飛び越えたかに思えたが、実際はたいして飛ばなかった。前輪が見事、門に挟まった。

幸い私の身は門をすり抜け、越えた先の道路をころころ転がった。背中のリュックがクッションとなったおかげで全くの無傷だ。

道ゆくワゴンに轢かれそうになり、あわてて歩道へと走った。

あわてて走った先は門とは反対側だった。

私は自分の過ちに気づいた。

まゆみ号はまだ門の中にいた。

門の内には奴らが拳として押し寄せている。今にも道路を渡って来そうな勢いだ。

真由美は酷い有様だった。激突の衝撃でかごは変形していた。しかしそれでもなお私を守っていた。

門は真由美がうまく引つ掛かり、開かなくなった。その姿はとも勇ましく、彼女とともに歩んだ五年間を思い出させた。

「真由美――――！！！」

そしてその姿はいつものように俺の背中を押してくれた。

見送る真由美を背に私は泣きながら走った。その足となっていた真由美はもうおらず、一人で走る姿はいつもより遅かった。

第三話…女（8749）の幕 桃色いびるキック（前書き）

これからなんと第二の主人公の登場となります。

第三話：女（8749）の幕 桃色いびるキック

私は誰なの？

孤独すら忘れさせらる白と灰色の部屋で女は呟いた。初めてこの部屋に入ったときは、まるで牢屋みたいだわと思った。今は少し古風な木製の机とお気に入りの茶色くて脚の長いベットなどが置いてあり、少しは私の好きな様になっている。清潔感あふれる部屋には窓が一つだけ。窓の外はいつそう緑が濃くなった木々で覆われ、暖かい木漏れ日が部屋をぼんやり照らしている。

今となつてはこが唯一の私の居場所、この部屋にしていると安心する。

なにせ私はもう五年もここにいる。今朝も先生はしばらくすれば思い出すよって言うてくれたけど、たしか四年と三ヶ月前にも聞いて、その二週間あとにも聞いて、更に一ヶ月あとも聞いた。そのあとはだいたい二週間から一ヶ月半に一回くらいで聞いたつけ。

ここに来てからは日常のほとんどを記憶するようになった。日記をつけるのが楽しいから。しかしそれよりもより怖かった。覚えないうとまた忘れそうで。

——私は十二歳のとき友達の誕生日会へ行った。それから
のつらい毎日は覚えている。

——でも、それより前のことが何一つ思い出せないの。

——気が付くと私は道を歩いていた。手には友達の誕生日
に渡すはずだったクマのぬいぐるみを持っていた。

——でも、それを誰に渡したかったのか覚えていない。

——もしかしたらそれはプレゼントなんかじゃなくて、混
乱する私が自ら作り出した嘘の記憶なのかもしれない。

——恐ろしく日差し強い住宅街、通りには誰もいない。

あれ？私こんな所で何やってるんだろう。ぬいぐるみ？何これ？

そうだ、ゆかちゃんの家と呼ばれてるんだったわ。ゆかちゃんち

どっちだろう？ゆかちゃんて誰だろう？

たしかママが知ってるはずだわ。お家に帰らなくちゃ。あれ？お家何処だろう？

—— あれ？

—— あれ？

—— 私、誰だっけ……………。

さんさんと降り注ぐ光は、舞台の猿を照らすスポットライトみたいで大ッ嫌いだった。すぎる思いで電柱にもたれ掛かかり、黄ばみがかかった貼紙を目でなぞる。

「しもざわクリニック、来月オープン！」何か思いだして。お願い。

後で気づいたことだが、この時私が無くした記憶は私の生活の全とと言っても過言はなかったが、幸い言葉や知識、日常において一通り必要なことは忘れていなかった。

私は歩き回った。ただただ。思い出せる気がして。始めのうちは平気だった。頭でも打ったんじゃないの。きつとすぐに思い出せるわ。

一時間…二時間……五時間。歩いている内に小走りになり、小走りはいつしか全速力になった。靴は脱げ、靴下はボロボロになったがそれでも私は走った。

ここ何処？ねえ、誰か教えてよ。私、誰？ねえ、誰か答えてよ。

遠くで犬の遠吠えが聞こえる。何気ないその叫びは世界に自分がいることを誰かに伝えているんだって今分かった。

わけが分からず道端の郵便ポストの横で泣き続けた。自分に降りかかった事実を子供ながら理解した。“きおくそうしつ”漢字なんてちんぷんかんぷんだった。泣いた。涙がなくなっちゃうくらい。そうすれば「お母さん」が来てくれると思った。でもそのお母さんの顔すら思い出せなくてもっと泣いた。

そこに白髪の多い、感じのいいおじいさんが声をかけてきた。「お嬢ちゃん、どうしたの？」ぬくもりのある温かい声は混乱した私を心底安心させた。

「誰？私を知ってるの？」少し泣き止んだ私は答えた。

おじいさんは、自分は「医院長先生」だと名乗った。おかしな名前だと思った。

「なんにも思い出せないの」また泣きそうになった。この世に自分の居場所なんてどこにもない気がした。

「それは困ったなあ」院長先生は私より困ったような、それでいて泣きそうな顔をした。

「よし、じゃあとりあえず今日はうちに来なさい。今日はもう暗いから」

そう言って院長先生は私を先生と同じくらい優しい先生の奥さんのいる家へと連れて行ってくれた。

もしあのまま誰も声をかけてくれなかったら。

もう私なんて何処にもいなかっただろう。

―― 始めの一ヶ月くらいはずっと院長先生の家にいた。

私のことを方々探してみてくれたが、結局わからなかったらしい。私が十五歳の時に聞いたのだけれど、警察に聞いても搜索届けも出ていなかったらしい。それを聞いたとき私はまた泣いた。私の探している人たちは私なんていらなかったんだ・・・。

身元不明の子供として保護されそうになった私を医院長先生は自分の家に引き取ってくれた。

バーベキューをしたり、医院長先生の友達のパーティーに招待されたりして本当に楽しかった。一人なことを忘れようとしたがそれでも毎晩泣いた。あの日聞いた犬の遠吠えのように。

一ヶ月を過ぎると、私はこの施設に連れてこられた。医院長先生は養子になれと言ってくれたが、そこまでお世話になるのはいいないので断った。

この人たちはいつも笑顔で明るかったがそれでいて遠く感じられた。他に入居者が数人いるだけでその人たちもいつも自分の部屋に閉じこもっているのだまらなく寂しかった。

そんな私を氣遣ってか、医院長先生はたまに会いに来てくれた。お金のない私に家具を買ってくれ、施設のお金も払ってくれた。

——いつまで待っても迎えは来なかったけど、最悪でもなかった。何でこんなにやさしくしてくれるの？私の問いに医院長先生は「孫ができたみたいでうれしいからさ」と答えてくれた。私がいることで喜んでくれる人がいる、そのことは私を幸せな気持ちにしてくれた。

そんな優しい医院長先生もういない。半年前、七十歳になった医院長先生は老衰で亡くなった。お葬式では泣かなかった。

どこも傷のない姿は、優しい優しい院長先生に神様が与えてくれた
幸福な死にかたのような気がしたから。

その一週間後、今度は六十八歳になる院長先生の奥さんも老衰で亡
くなった。

そのあと私は一人きり。本当は四年前になってしまはずだった
から、寂しいといえは贅沢になる。

私は誰なんだろう。

毎日同じことを考えながら過ごすうち、なんだかつらくなってきた。
せめて自分の名前くらいは思い出したい。

「次、診察どうぞ」看護婦さんがドアから顔を出し、私を呼んだ。
いつも笑顔のその看護婦さんも私の名前を呼んだことはない。私

にすら分らない自分の名前……。

「はい、今行きます」

一人がけのソファーから立ち上がると、私は変わらない日々が心底嫌になった。私を探してくれる人も心配してくれる人もいない。

いつまで続くんだろうかと考えた。どこまでも続く廊下を歩くようなひとりぼっちの淋しい時間の連鎖。

見上げると天窓から光が差し込んでいた。スポットライト、あの悪夢の始まりの日みたい。

そう、私はまだ舞台の上なのね。

私は窓から中庭へと抜け出した。何もかもが狂ったあの日、私の過去、そして私の名前……。すべて取り返す旅に私は出た。

第三話…女（8749）の幕 桃色いびるキック（後書き）

8749というのはこのキャラクターの登録されている保護対象者番号です。本編で触れるかどうかは未定ですが。。

次回もよろしくおつきあいください。

第四話…147円ノリットル(前書き)

やった。間に合った！

第四話… 147円/リットル

ひいひい、ぜうぜう。

必死のいで東に西に、商店街を反時計回りにぐるり。ふらり聞こえる四面楚歌に、気がつけば路地の裏。

しかしここで捕まってしまうば今までの苦労は灰燼に帰す。

えいやつ、と更に国道沿いを南に突っ切り、やつのことで追っ手共を巻いた。

情けない。最後まで追いかけるよ。根性が足りん根性が！若者がそんなんだから今の日本は……………。

「いたぞーッ！」

常人では考えられない反射的クラウチングスタートで、俺は数百メートルを追いかける奴らとどっこいどっこの早さで走った。

こっちは重荷を背負っているのだからどうして私も健脚の持ち主であろう。

走りながら私は考えた。なぜ自分が追われる身であるかを。

バットを持った男達の目は血走っている。しかし、そいつらが着ているTシャツでは某アニメで見覚えのある女性達が笑っている。

そう、その姿さまさにオタク…。

そしてそいつらが追いかけているのが…俺。リュックサックを背負う俺の姿は第三者から見たらあいつらと同じだろうな…。

背中のリュックサックが一段と重く感じられた。

あれ？さつき門の先で俺を轢きかけたワゴンが止まっている。そしてどういう訳かその運転席の窓から白髪の老人が身を乗り出して「早く、早く！」と叫んでいる。後部席のドアは開いている。

まさに渡りに船！！

細かいことは全く考えずに後部座席に滑り込み、私が乗ると同時に車は急発進した。オタク共は風景の後ろへと流されていくかのように見えなくなった。

「さつきは悪いことしたアル。オマエオワレてる。悪いことしたからワタシオマエ連れてく。行きたいトコ言え。」

ニコツとした笑顔が可愛い謎の中国人らしき男は、私を、追っつの届かない私の知人の家まで送ってくれた。

「ワルイことしたら警察行くアルヨ〜！」

時速90キロで進むワゴン車に向かって手を大きく振り、感謝の言葉を送った。

そして私はたどり着いたのでアル。

木造でやたら洋風のアパートの一室の前に立った。

憎しみの籠った人差し指で、しかし優しく、なおかつ花を見つめてためらう蝶のように優雅にインターホンを押した。

「ぴんぽーん。」

「ぴんぽーん。ん。」

「……………」

薄茶色のインターホンはやたらと「ぽ」と「ん」の間が長い音を出した。久しぶりの国際交流にうきうきしている俺を小馬鹿にするような音だ。

「ぴんぽーん。」

「……………」

「ぴんぽーん。」

「……………」

「……………」

おいっ、さっさと出てこい！私は激怒した。なかなか表れない友

に對してではない。

次はこの変わったイントネーションの持ち主ともおさらばだ！そう思いながら手頃なコンクリートブロックを振りかぶり、狙いを定めていると、やっとのこと「ハイオク」が出てきた。

ハイオクはコンクリートブロックを振りかぶる俺をみて、一瞬「なんぞ？」という顔をした。が、俺は構わず狙い続けた。

ハイオクは二度三度、俺とブロックを見比べると何に合点したのか転がしてあつた角材を拾い、「ばっちこゝい」とケツをぷりぷりバッターのように立った。

そのまま数秒間私達は相對し続けた。吹きすさぶ冷風が私達を冷

やした。

それに比例するかのように私の体温はみるみる上がっていく。

負けてなるものかとも思ったが、風より寒い視線を感じた私はついには恥ずかしさのあまりブロックを脇に捨ててしまった。

ブロック塀の隙間からは、らんらんと輝くチルドレン達の目が見える。おおよそ、得体のしれない変な奴として常日頃マークされているのだろう。こんな辺境ですらこの人数を集めるとは、まったくプロ顔まけの集客率である。

ハイオクは汚れの無い視線など一向に気にする様子などなく、相変わらず汚い尻をぶりぶりやっている。

「やめろ。君のその姿は目に毒だ。その迷惑なインターホンを壊すのはあきらめるよ。」

仕方ないので自分から切り出した。恥じらう気持ちなんぞに負けたのだ。

「なんだ投げねえのか…。」

そうとう残念そうにハイオクは呟いた。放っておくとあのまんま何時間もぶりぶりやっていそうで怖い。

整理の行き届いた玄関から上がって、いつもの部屋に座った。応接間だ、いやキッチンだ、リビングだ。ありとあらゆる条件にピタリと当てはまる超理想的機能空間は、2LDKの部屋に無限の奥行きを与えている。どれもこれもハイオクに初めてできたらしい彼女の身技なのだそうだ。

そのことで私とハイオクは再三電話で協議し合い、意見を戦わせた。といっても一方的に好きになったのはその彼女のほう。男どもがとやかく言える筋合いではなかった。その彼女はたびたびハイオクのアパートにやってきては散らかった部屋をかたづけ、やってきては食いもしない料理を振舞うのだそうだ。

顔にはまるで生気がなく、だのに目だけはやたら赤々とぎらついている。その姿は鬼かもののけの類のちかく、もし深夜にばったり出会おうものなら二目となく逃げ出してしまうだろう。浮世離れた風貌の奥底、人がこころとかいうところに、少女のような心が眠っていると知ったのは俺とその彼女くらいのものだ。

顔に生気がないのはハイオクがほとんどいつさいのものを口にしないからである。そして唯一飲むのが、花村印の栄養ドリンク「地上人」である…。謎の多いそのドリンクのパッケージには「ヒトよりもヒトに近い飲料水！」と書いてあり、ただでさえ胡散臭い花柄の見た目をよりいっそう胡散臭くしている。

人に必要な栄養素が全て入っているんだ、と昔ハイオクが自慢げに言っていた。本当かどうか俺は知らない…。

そして目が赤い…、これについては説明する必要もないだろう。ただ充血しているだけだ。年中。

その「ハイオク」の顔に惚れたのだそうだ。まったく人の出会いとはわからない。ゴキブリすら住めない「廃屋」のようなアパートで一人「ガソリン」のような臭いのする飲料水をエネルギーにする男…。だから私はこいつに「ハイオク」と命名したのだ。

だのにその決定的事項の一つ、無添加百パーセントで散らかっていた部屋はこのとおりかたずいている。彼女の作ってくれた手料理を口にするのも時間の問題である。

まったく人の出会いとはわからないものだ。よく磨かれた窓から降り注ぐ、甘酸っぱい太陽のビーム光線に立ち向かおうとした。立ち向かおうとしたけど、立ち向かおうとすればするほど、きりきりむねが痛くなって、私はカーテンを閉めた。

机兼椅子にもたれかかると、逃げ切った安心感と疲れが一気に俺に追いついてきた。リュックサックを枕に寝転がりたかったが、そうしてしまうと直ぐに寝てしまいそうなので辞めにした。

「その様子だと成功したみたいだな。」

ハイオクが去年の夏祭りで手に入れたらしいハイカラな水色の盆に、「地上人」を二つ乗せてやってきた。

第五話・・・スモッグ

ハイオクは何がおかしいのか半笑いでやってきた。多分、今日は奥に彼女が来ているんだろう。片手で盆を支えているためバランスが悪く、大きな体をクネクネさせている。その体勢のままにやにや笑っている。

「おい、笑うな。」尻を出し、左右に振る馬鹿に怒鳴った。

ドカンッとハイオクが目の前に座り、

「あれは手に入ったか？」と促すように聞いてきた。相変わらずにやにや笑っていたので右手を顎に突き上げる。でかい体が団子虫のように丸くなったところで、

「無論だ。俺にかかればざっとこんなもんさ。」と答えた。リュックを軽く叩くとぼんぼんといういい音がした。

「そうか。やっぱりお前頼んで正解だったみたいだな。この手の依頼は俺より得意そうだ。」顎を摩りながら体を開き、ノートパソコンを開き、カタカタと何やら打ち込んでいる。どうやら依頼主に目的のものが手に入ったことを伝えているようだ。その作業をすべてこちらを向いたままこなすとは気持ちの悪い友人だ。

「この手の依頼って、こんなの依頼って言のか。オタクどもから麻雀でアイドルのチケットふんどくっただけだ。」チャックを開け、中身をぶちまける。ライブチケットがざっと三十枚近く。それにポスターと時計、こまごまとした取るに足らないグッズが数点。俺は昨夜、知り合いの部屋を借りて、賭け麻雀をした。賭けたのは向こうはこちらが指定した五龍サキのチケット、俺は最高に間取りのいい自分の部屋を賭けた。真向かいが女子棟で、毎朝女子のしゃべり声で目が覚める部屋だ。運がいいときは向こうからしゃべりかけてくるオマケつき。騒々しいのだけなので早く引越したくてしかないのだが、どいてやるのも惜しい気がして今だに動けない。

その魅惑のリゾートを賭けて俺は連戦連勝。実は役が出来にくいように牌の数を調整したのだ。そこで俺は数の多くなったやたらと簡単な役ばかりを作る。何も知らない向こうは負けが混んでくると出来ない役ばかり作ろうとして更に負ける。後は思う壺。あつという間に全部のチケットを搔っ攫った。

「あれ、チケットだけでよかったのに。」

「馬鹿、少しくらい勝ちすぎただけだ。俺の分の取り分もあるし、それに真由美が、真由美がぶっ壊されたんだぞ。」語気を強め怒りをあらわにしたが、ハイオクはサラッと「また何か壊されたのか。そいつは災難だったな。」と流した。

「全くだ。こんなんじゃないくてパパラッチしないか。このサキとかいうやつのスキャンダルをあいつらの額に押しつけてやりたいんだ。」俺は掲げたポスターで笑う少女を指差し怒鳴った。

ポスターの少女は相変わらず笑ったままだ。数年前に一度だけテレビに出たと思ったらドラマに出ていて、ドラマが終わったと思ったら映画に出ていた。今はだれもが知っている超売れっ子アイドルらしい。まだ14かそこらなのに大変だなあと思う。

世情に疎い俺にはその程度の情報しかない。「まあ、心配するな。今頃あいつらこっぴどくしぼられてるよ。」やれやれといった感じでそう言った。

「どうして？」

「だってそのチケット、御堂のдар。」当然、といった顔。

「ああ、そうか。」俺は怒る御堂の姿を想像して笑った。怒鳴られるオタクどもの姿も。

俺の上の上の学年。いわば先輩に値するそいつは体格がやけにでかく、したがって声もでかい。たまにどこから仕入れたのか分からないレア物のチケットを大量にさばくので子分もいる。だが、いわゆる留年生というやつで、おまけにいつからいるのか分からないく

らい長いこと同じ学年にいる。きっと俺らもあの人より先に卒業するだろう。だから俺たちは軽蔑の念を込めて御堂と呼び捨てる。今頃慌ててるに違いない。たかがチケットとはいえこれだけの数だ。去年の春にあいつに殴られた右ほほが勝手に笑っていた。

「で、誰だ。お前に依頼してきた奴ってのは？」こんな依頼は初めてなのでずっと気になっていた。

「ああ、会う？おい、サキちゃん、こっち来いよー。」

「は？まさかお前の彼女？サキってまさか・・・。」廊下を走ってくる音が聞こえる。トン、トットン、ダダダダダ・・・。

ガッン！

「おい、狭いんだから走るなって何回言えば。」

「ハア、ハア。すいません。私走り出すと思いつきりやっちゃうんです。」

身長が二メートルもある、目の赤い、俺の謎の友人に呼ばれて国民的アイドル五龍サキは現れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4193/>

俺日記（私）

2010年11月21日11時53分発行